

零

全作品と講評

www.columnland.net

雨令零

天から命令を受けて雨
 何地上から降って
 空に遣わさる
 知れたい使用者だろうか
 。

よみかき
 こころの
 命を
 分け
 無
 して

「安全」とはなんだろう

一般人が思う「安全」とは

およそ「危険がないこと」であろう

しかし実際に「危険がない」なんてことはない
わずかながらにも「危険」というのは

どこにでもあるものだ

ところで日本の「安全」に対する意識と

欧米など共有されるグローバル基準の意識には
どうやら違いがあるようだ

日本はいわゆる「ゼロリスク志向」である

「ゼロリスク志向」というのはその字のとおり

危険がないことを求めるということである

それに対して

許容可能なリスクのレベルを定めてそれを受け入れることで

リスク削減には妥当な費用と時間だけをかけようと考えるのが

グローバル基準の意識である

日本は今比較的安全で平和だろう

この安全は「ゼロリスク志向」のおかげだと

言えるところがあるかもしれない

しかしながら

実際にリスクをゼロにすることは不可能であり

そのために無限の費用と時間をかけ続けるようなことは

するべきなのだろうか

このままでは日本の産業は世界に取り残されてしまうかもしれない

4 中空の原点

気がつくど俺は一人森の中に倒れていた。記憶を探るが、何があったのか思い出せない。出てくるのは『ゼロ・クリア』という俺の名前だけだ。俺はどこから来て、なぜここにいるのだろうか……。

「久しぶりだな、ゼロ」

突然の呼びかけに振り向くと、どこか見覚えのある姿がそこにあった。

「誰だ、貴様は」

「私はプロトという。お前とは同郷の仲でな、同じスペースコロニーで生まれたのだ。それを忘れてとはな。もしや、記憶をなくしたのか……。まあいい、お前には力を貸してもらいたい。人類を支配するためにな」

“世界”ではなく“人類”を支配するだと。

「わが軍団は全てロボットだ、私を含めてな。そしてお前もだ。信じられぬなら腕時計を外してみるのがいい。人ではありえぬ力が出せるはずだ」いわれたとおり時計をはずし、そばの木を軽く叩く。すると異音と共に幹はへし折れ、ギザギザした断面の切り株と倒木とに分かれた。

「間もなく我が軍はウエストポリスを襲撃する。合流するつもりがあるなら来るがいい。お前の記憶も取り戻してやろう。」

そう言い残すと、奴は光に包まれ消えてしまった。同時に天からロボットが降り注いでくる。その降りた先がウエストポリスだろう。問題はどちらの味方となるかだ。人類か、ロボットか。しかし、ロボットでなく人類につく理由はよほど無いように思われ、プロトは失くした記憶すら取り戻すといっている。ロボットにつこうと思ったとき、脳に雷が走った。『人類の光となって』という少女の声。カプセル越しの風景。重なる俺の叫び声。

どうやら失った記憶の断片らしかった。俺には人類を救う義理なり義務なりがあるのかもしれない。そして、俺は駆け出した。すでに戦いの始まった街へ、ロボット軍を止めるために。

戦略はすでに考えてあった。ロボットである以上、例外を除いて中央が指示を下して実行するはずだ。つまり、中央を潰せば無力化できるわけだ。

最前線までたどり着くと、後ろから司令官らしき人物に呼び止められた。

「その姿はゼロじゃないか。コロニーのゼトだ。見ての通り戦闘中だが、終わったら話がしたい」

「いいだろう。力を貸す」

戦闘は二時間ほど続き、民間人の退避を待つて防衛軍は撤退した。勝つための戦いでもないからだ。そして、撤退中のジープの中でゼトから過去を聞くことができた。コロニーは巨大な研究施設だったらしく、ゼトはその防衛役にあたっていたそうだ。俺は完全自立型、プロトは自己複製可能なタイプとしてそれぞれ開発されていたらしい。さらにコロニーは隕石との衝突を起こし、居住環境は無くなり、研究もほとんど闇にほおむられたそう。そう、俺もプロトも書類上、完全破壊されたこととなっている。

更なる話し合いの末、プロトの本拠地は廃コロニーと断定され、単身そこに潜入した。単身なのは、地上とコロニーを繋ぐワイプ装置が一人分しかなく、さらに俺が志願したためだ。そして、すぐにプロトと出遭う。

「実に残念だよゼロ。実に残念だ！でも遅くは無い。人類に捨てられた憎しみを思い出せ」

奴はコロニーごと、自分が破棄されたものと思い、人類を恨んでいたのだろう。

「思い出したさ。人から受けていた愛情をな」

言うと同時に俺はプロトに跳びつき、同時に自爆を開始した。コロニーすら巻き込むほどの自爆でプロトと無理心中を図る。これが地上で出した一番確実な方法だった。ゼロへと還元されていく中で、ロボットも走馬灯を見るのだろうか、俺は失くした記憶を完全に取り戻していた。あの少女の『人類の光となって』という台詞。あれこそが俺の出発点。今、俺は光としての役割を果たし、宇宙の闇へ、ゼロへと戻っていった。

「今日返ってきたテストの点数悪かった。わたしは明日から生まれ変わります！だからみんな応援よろしくね☆」

某SNSでつぶやくと、ちょうど家についた。部屋に入ると彼氏から携帯に電話がかかってきた。

「ちょっと直接話したいことがあるんだけど」

「良いよ、今なら家に誰もいないし、うちに来ていいよ」

「今から彼氏がうちに遊びにくるんだー相変わらずらぶらぶ夫婦です(笑)」

つぶやきが専門のSNSはあまり人とのコミュニケーション取れなさそうで微妙だと思っていたが、始めてから一週間ですっぱりつかってしまっていた。

呼び鈴が鳴った。玄関に行って扉を開ける。彼氏を部屋に連れて行く。

「どうしたのいきなり？ねえ見てみて！これまた駅前の雑貨屋さんで買ったのー！かわいいでしょ？」

私はデフォルメされてないリアルな大きなカエルの置物を彼氏に見せた。

「なあ、俺たち別れないか？」

私は耳を疑った。

「え…な、なにいつてんの？そ、そんなことよりこの服見てよ！下北の古着屋で——ってちょっと何してんの！？」

彼は私が部屋中に貼っているインディーズのロックバンドのポスターをはがし、集めた個性的な雑貨を部屋から放り出し始めた。

「ちょっとやめてよ！私の大切なものなんだよ！？」

「お前何がしたいんだよ。そんなに自分を取り繕って誰に媚び売ってるんだ？サブカルチャーにはまってる自分は普通とは違うって言いたいのか？個性をアピールしてるつもりなのかよ。それだけじゃない。ちょっと自分の体裁をよく見せようとして口先ばかりのつぶやきをして…俺に隠れてタバコ吸い始めたのだから知ってるんだぞ。最初は何かつらいことがあるのかと思って黙っていたけど、これじゃあお前は自分で自分の首を絞め続けることになるんだよ。俺はそんなお前をもう見たくない」

私は何を言われているのか頭で理解できなかった。気づいたら彼が放り出したものを無我夢中で彼に投げつけていた。ひとしきり投げ終わって疲れると、彼が口を開いた。

「お前が普段どんなに苦勞しているかも分かる。辛いのも分かる。けどな、お前はそれに真正面からぶつかっていかなきゃ解決につながらないんだよ。一度何もかも放り出してみる。見てくれも自信もプライドも何もかも。案外その方が楽かもしれないぞ？俺は偉そうにこんなこと言ってるけど、俺だって何も無い。何も無いけど、結構人生楽しいもんだぞ」

玄関のドアの閉まる音が聞こえる。散らかった部屋で転がったカエルと目があった。デフォルメされていないそのリアルな目に見つめられた私は、気持ち悪くなって吐いた。馬鹿だなあ私。こんなに私のことわかってくれている人、手放しちゃったよ——

少年

飛び降りた瞬間、少年の世界はセピア色に染まりました。

少年の時間は急激に減速し始めました。

地面が近づけば近づく程、少年の時間は固まってゆきます。

一瞬で死ねると思っていた彼は戸惑いました。

辛抱強く待つ少年ですが、地面と少年の距離は縮まる様で中々縮みません。

少年はこの時、亀に追いつけないアキレス*の気持ちがなんとなく解りました。

無限の猶予が与えられてしまった少年に残された選択は後悔でした。

少年の一秒は無限で、少年の無限は少年の零秒でした。

零が一、一が零。零は零であって零でない。

そんな時間を与えられた少年、後悔ですらし尽して、やがて夢を見始めます。

楽しかった事、苦しかった事、ただただ反芻はんすうします。

反芻して反芻して反芻して、零の概念も亡くした少年

文字通り亡零ぼうれいになって後悔と反芻を繰り返します。

※アキレスと亀

幾らか前に居る亀と幾らか後ろに居るアキレスが走っている。アキレスは亀よりもずっと速く走る。

始め亀が居た位置にアキレスが着く頃には亀はそこよりは幾らか先に居る、アキレスがそこに着く頃にもやはり亀は多少なりともそこより先に居る。

つまりアキレスがどんなに走ろうとアキレスは亀に追いつくことは無いのだ。

「……寝てる、わよね」

ソファの上で横になっている対象物の目の前でヒラヒラと手をふってみる。

反応なし。完全に寝入っていることを確認。

これより予てよりの計画を実行しようと思う。

慎重に、慎重に。

今日この瞬間のためにいろいろな準備をしてきたのだ。

失敗は絶対に許されない。私は思わずこくりと唾を飲み込んだ。

意を決して少しずつ接近。

確実なる目的遂行のため何度も何度も角度を調節して。

達成まであと少し。そう思うと自然と胸の鼓動が高まるのを感じた。

はやる胸を押さえつつ計画の最終段階に突入する。

先ほど確かめた角度で距離を詰めていく。

ばれないように呼吸を止めて、ちよつとずつ、ちよつとずつ。

最後の最後で怖気づいて、震えそうになるのを必死で抑え、ゆっくりと重心を傾けて、そして。

0の嫉妬

0「なあ1、おれの存在価値ってなんなのかな？」

1「お前の存在価値？うーん…。」

0「やっぱりおれの存在価値なんて名前の文字通り0なのか…。お前はいいよな、全部の整数の土台みたいなもんで。おれなんか何人いたところでおれのままで、マジックだよ。」

1「…。」

0「数がでかいやつはいいよなー、それだけで存在感が激しくあるもんな。おれなんか存在しないからな、実際おれのこと見えてないだろう？」

1「いや、まあたしかに見えてはいないけどさ…。あ、でもどんな正の数でもお前が割れば ∞ になるじゃん！それってすごくない？」

0「そこもむかつくところだよなー。なんでおれががんばって割ってやってんの注目されるのいつも巨大な ∞ なんだよ。数が大きいやつはいいよなー、それだけで存在感あるし。だいたい自然数ってなんだよ。なんでおれが入ってないんだよ。おれは自然じゃないのかよ。なんでお風呂入るときに0から数えちやおかしいんだよ。てか負の数と一緒にすんな！やつらまさしく消極的なので有名だからな。一緒にいるだけでこつちまで沈むわ。」

1「まあ、お前は負の数と正の数の中立みたいない存在でいいんじゃない？実際おれらとあいつら立場逆なことあつて結構仲悪いし。」

0「存在価値0で力0のおれになにをしろと？負の数のやつにおれを足してやったところでなにも変わりやしないからな。おれができること言えばおれを掛けておれの仲間にしてやることだけだ。…さてよ、おれがこの世のすべての数に掛けられれば全員おれの仲間になるのか。これは実行するしかないな！よし1！まずはお前からだ！必殺！乗法！」

1「さて、やめろ！はやまるな0！う、うわあああああ……………」

こうして全ての数は消え去りこの世は大量の0が支配するようになった。しかしそこには何もな…。

「そこ危ないですよ。」

これが彼女から最初にかげられた言葉だ。

ここは群馬県沼田市の吹割の滝。東洋のナイアガラと自称しているが、それほどの流量もない。それでも雪解けの季節だからであろうか、心なしかどうどうという音は秋にきた時よりも大きく聞こえる。

この滝はV字になっている。片方が滝で、もう片方がこの滝を眺めることが私の好みである。しかしこの滝は見下ろすようにしないと、滝の全貌を捉えられない。だが柵はなくただ白線が引いてある危なっかしい滝ではある。

そう、その時は私はちょうどその線をまたいでいた。

彼女はすぐに雑念を捨て、再びカメラのファインダーを覗き込んでいた。おそらく私の影が写り込んでしまったのだろう。いつもだったらこの時点でこの場を立ち去っている。この時にそう振舞えなかったのは、言に尽きる。

そう、落ちてしまったのだ。

恋、というやつに。

一人で絞りから何まで全て

し離れたところから静かに見

しかし、そんな日常はいつまでもは続かなかった。

彼女は冬の飛騨山脈の山を撮影しに行き、雪崩に巻き込まれてしまった。捜索隊のお陰でパーティーのうち彼女以外の人は無事に救助された。だが、彼女が見されたのは翌日になってからだった。意識不明で多数の凍傷など、よく死なないでくれたと言いたくもなるような姿だった。医者ではない私は何が出来るわけでもなく、ただ待合室の椅子でほぞを噛んでいることしかできなかった。だが、手術が終わっても、彼女は目を覚まさなかった。

医者に言わせると「あと3ヶ月以内に意識が戻らない場合、生このままの状態では有る可能性が高い」とらしい。私にそれを告げたのは、それでも延命治療を施すかの意思決定をしておけという意味なのだろう。だが、選択肢など元からない。血の通っている彼女の横顔だけでも拜めれば、私はそれでも満足だ。

それが破られる時、どんな気持だったかは覚えていない。ただ、大切な物を失ってしまう恐ろしさ、それに突き動かされていた。

病院からの一本の電話。彼女の容態が気愛したという。慌てて飛び出るが、ビーターのコードに引っかかった。直している時間すら惜しい。私は、そのままにして、玄関にだけカギをかけ、病院を駆けつけた。

もう既に私は何も持っていない。自分の不注意で家を失くした。借金で友人も無くした。

そして、彼女も亡くした。もう何も残ってはいない。

いや嘘だな。まだ、持ったままだったものがある。

「さあ、最後に残って残ってしまったものまで捨ててしまおうか。」

そうつぶやき、私はこの最後の恋路の原点から、歩を踏み出した。

いろいろな底辺

「0ケルビン」

最低温度。分子の運動が完全に止まる温度。

「0メートル」

長さや距離が無い、もしくは極端に短いという状況。

陸上競技の跳躍、投擲種目ではファール扱いとなり、球技でも空振りには「記録なし」扱いとなるので「記録0メートル」を目にするのは至難の技。バントの名手、元巨人・川相なら出来るかもしれない。

「0点」

言わずと知れた最低点。どんなに平均点の低い定期テストでも絶対に赤点になる。

教授に美味しいお酒をプレゼントして土下座をしても絶対に単位は来ない。

あの欽ちゃんでも「あと一点入れてあげてよ」みたいな情けをかけてすらくれない。

「0へえ」

常識、もしくはマニャック過ぎて明日どころか一生使えないムダ過ぎる知識。

友人との他愛ない会話で使えば変な空気になる事間違いない。

異性を口説く時、自慢気に話せば大怪我すること間違いない。

「酒蔵当主の代目」

ただのおっさん。

息子は起業家として偉大な功績を残すかもしれないが、コイツはただのおっさん。

「0回目的プロポーズ」

ただの子キン野郎。「僕は死にましえん」と誰に言う事もないし、

人生に何のドラマも起こせない。妄想、もうよそつ。

「新着メールは0件です」

ただの日常

「秘密戦隊ゼロレンジャー」

派手なタイトルロゴに豪華な音楽で、延々と背景だけが流れ続けるオープニング、

本編は無抵抗な市民を悪の軍団が支配していくだけ、という超鬱番組。

間違っても子供には見せちゃいけない。

「0個」

自分が今までバレンタインデーに貰った本命チョコの総数。

これを読んでいるあなたも当然同じだと自分は信じてやまない。

く22××年、世界はすっかりロボットの時代になっていたく

ひとり一台は持っていて当たり前のロボット

ペット型ロボット、お手伝いロボット、二次元ロボットなど、たくさん種類があり、今では子供も持っていてあたりまえの物である。

そんな中、とある少年「零治」はロボットを持っていなかった。家庭があまり裕福ではなかったのだ。

ある日、零治は道端に捨ててあるロボットを見つけた

そのロボットは、よく見ると「超リアル！人型ロボット」と書いてある。

家に持ち帰り、動かそうとしたところ、錆びてうまく動かなかった。

試しに油を塗ってみたら、なんとロボットはたちまち太ってしまった！

体に油を塗ったら、脂がついてしまったのだ。

そして零治はこの太ったロボットを「贅肉ロボット」略して「ゼロ」と呼ぶことにした。

そして零治はこの太ったロボットを痩せさせることを決意した

果たしてゼロは痩せることができるのであろうか？

ゼロと零治の友情を描いた心温まる物語

贅肉ロボット ZERO

生まれたときは まっさらで

その手には何も握っていなかった

だって

ここに生まれてくるために

すべてを差し出さなければならなかったのだから

もっているものがたくさんあるから

もうないものがあるから

ぼくはぼくを責める

この手の中にあるものをすべて手放して

重荷も思い出もすべて

身軽になろう

もう

ぼくを縛るものはどこにもない

ボクがボクデアルヒツヨウモナイ

どうしてそんなことをいうの。

本当に大切なものも振り捨てて

あなたの存在が零になっても

虚ろの気配は残るのに。

あなたが消えてそれだけで、

流れる涙があるのに。

ねえ、君に出会うまで

ぼくは流れのなか

消えるときを待っていた

でも

君を泣かせたくはないんだ

きみの手を放すわけにはいかないんだ

魂の奥底で手を取り合うような

本当に大切なものだけを取り置いて

あとは手放したって構わない

そして

ひとはひとのまま

ふたたび、生まれ変わる。

コンテスト結果

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
01	酸性雨	8 pt	3 位	1 sp
		<p>雨が担った命令は、この世を零に戻すこと。 かなしいね。 すばらしい発想力とみごとなレイアウトにうっとりの 今週の表紙です。おめでとうブロンズ・メダル!! 特別賞：レイアウト賞 from T班（やっときました）</p>		
02	零危険	4 pt	6 位	0 sp
		<p>正統派、入ります。さらっと読みやすく、でも主張の 軸がしっかり通っています。 ありえないゼロリスクを信仰のように奉じてしまう。 たしかに原発以後の日本社会は、よりそうなってし まっているような。さっくりと貴重な指摘でした。</p>		
03	無題（ゼロの使 い魔）	0 pt	10 位	1 sp
		<p>ストーリーを勝手に想像して納得してしまう。まさに 妄想乙の世界ですね。 さて、これで彼が友達の輪に入れたのかどうか、興味 しんしん。 特別賞：読みま賞 from V班（読みたくなったから）</p>		
04	中空の原点	0 pt	10 位	0 sp
		<p>ロボットvs人間の壮大な世界観を力技で描ききって いただきました。 光と闇、ゼロとプロト、いろんな比喩を散りばめて いただいたのですが、少女のドラマが設定に圧されて じゅうぶん見られなかったのがもったいなかった。</p>		
05	ゼロになる勇氣	5 pt	5 位	1 sp
		<p>なかなかすてきな彼氏さんです。だいじょうぶ、きつ と戻ってくる！と慰めたくなるほどに、この彼女さん の気持ち描写が共感を誘いました。 特別賞：病んでるのは男の方で賞 from Y班（勝手に 人の家のものこわすなっ！） イチオシフレーズ：「吐いた」</p>		
06	少年	2 pt	8 位	0 sp
		<p>アキレスと亀、小学生をダメす定番ですね。 そのアキレスさんを飛び降りのシーンに召喚して、物 理でなく少年の「意識」に置き換えた着想が、おもしろ かったです。「無限の零秒」、その先はどうなるの でしょうか。ためしてみてはいけません。</p>		
07	ゼロ距離	6 pt	4 位	0 sp
		<p>しあわせ0秒前、と読むべきか。 射殺0秒前、と読むべきか。 ふつうの読者さんは前者、ひねたTAさんたちは後 者。心理テストに使える。 ていねいな描写でどきどき感に寄り添えました。 イチオシフレーズ：「ゆっくりと重心を傾けて、そし て」</p>		

08	0の嫉妬	2 pt	8 位	2 sp	<p>「必殺！乗法！」のノリがすてきでした。何だか教育番組のアニメにそのまま使いたくなるような。</p> <p>0君を擬人化した作品は、今回とてもとても多かったのですが、そのなかでも思い込みの激しいキャラとして存在感が際立っていました。いっばしの危険人物ですね。</p> <p>特別賞：0で割っちゃダメで賞 from R班 法レ賞[®] (じょうほう) from W班 (必殺！乗法！)</p>
09	零からの一步	9 pt	2 位	3 sp	<p>凝りましたねー。長いストーリーを断片的に見せる手法。たしかにこれなら「中略」のワザを思いっきり使えます。誤字がなあ・・・</p> <p>でもなんのその。シルバー・メダル&最多特別賞ゲットです、おめでとう!!!</p> <p>特別賞：はやく出版社と契約して書店に置いてよ賞 from Q班 (小説化希望) 新しいレイアウト賞 from U班 (レイアウトすごい) レイアウト賞 from X班 (表紙よりもレイアウト賞だった)</p> <p>イチオシフレーズ：「そのままにして」</p>
10	いろいろな底辺	21 pt	1 位	0 sp	<p>うまい！うまい!!</p> <p>何がうまいって、もちろんゼロレンジャー鬱番組あたりのクライマックスの起爆力もだけれど、そこに至るまで、マジメからだんだん崩れていくはじけっぷり、クレッシェンドのつくりかたがとてもうまくできています。だから羅列でも飽きないんですね。</p> <p>圧勝の首位でしたね。今週のイチオシフレーズ大賞でも圧勝です。おめでとう!!!</p> <p>イチオシフレーズ：「ただのおっさん」×2 「こいつはただのおっさん」「ただの日常」「酒蔵当主0代目」「妄想、もうよそう」</p>
11	贅肉ロボットZERO	3 pt	7 位	1 sp	<p>あまりのバカバカしさ、お題とのつなぎのムチャぶりが、逆に爽快感を誘います。</p> <p>設定だけ見せて、番宣仕立てで読者に投げた工夫もうまく効いてますね。</p> <p>ツボに入った某TAさんの強力プッシュで本選入りを果たしましたとさ。めでたしめでたし。</p> <p>特別賞：超展開賞 from Z班 (超展開すぎる)</p> <p>イチオシフレーズ：「贅肉ロボットZERO」</p>
12	リーインカーネーション	0 pt	10 位	1 sp	<p>ラストはゆったりと人生のドラマをどうぞ。</p> <p>生まれて悩んで恋をして、また次のステージへと生まれ変わって。壮大な輪廻を親しみやすい対話形式でまとめて、とても心に響くきれいな今週の裏表紙でした。</p> <p>特別賞：輪廻転賞 from S班 (リーインカーネーションの意味より)</p>



www

www.columnland.net